

2012年度JCAS次世代ワークショップ・プログラム(藤井真一)

現代の紛争をめぐる地域間比較研究に向けて アフリカとオセアニアの事例から考える

■ 企画概要

本企画では、アフリカとオセアニアに見られる紛争と政治的混乱に絞って比較検討を行なう。両地域はこれまでも様々な側面で類似性が指摘されており、一方の議論が他方の議論に援用されることで得られた知見も多い(Keesing 1987; Lambek & Strathern 1998など)。近年、オセアニアの紛争や政治的混乱がアフリカと類似性を帯びてきているというオセアニアの「アフリカ化(Africanization)」という議論も出てきている。本企画は、両地域の紛争と政治的混乱の比較を通じて、現代の紛争に対する理解を深めることを目指す試みである。

世界的に見て、冷戦の終結により各地で内戦や地域紛争が頻発し、長期化する傾向がある。こうした事態を受けて、多くの研究者が紛争についての研究を重ねてきたが、その議論は国家中心に進められる傾向があった。

その一方、地域研究者たちは国家中心の視点にとらわれず多角的に地域にアプローチし、国家を主要な行為主体とした紛争の分析・理解に加えて、地域に立脚し、地域に暮らす人びとの動向を加える形での紛争の理解を提示している。しかし、そのまなざしは特定の地域に限られる傾向があり、地域横断的に考察するという視点が欠けている。

こうした紛争に関する研究史の流れにおいて、アフリカの紛争研究には厚みと蓄積がある。そこでは、国家や国際機関からみるマクロ・レベルの理論構築や事例分析と同時に、紛争を支えた人びとや紛争の影響を受けた人びとの生活からみるミクロ・レベルの紛争理解が多く生み出されている。これらのアフリカ紛争研究は、現代のほかの地域の紛争研究を牽引しているといっても過言ではなく、紛争後の平和構築といった実践への関心の高まりとあいまって、近年とみに着目されている。

一方で、オセアニアが「アフリカ化」しているという議論が2000年代になって起こされている(Reilly 2000; 2002)。1990年代後半から、

特にオセアニアの国々において、暴動・民族紛争・クーデタなど政治的混乱を示す事例(広義の「紛争」)が相次いでいる。「アフリカ化」とは、かつてアフリカ諸国でみられたような国家の政治的安定性の揺らぎを指摘した議論である。またオセアニアの紛争後の政治過程においても、アフリカが培ってきた紛争後の経験を活用しようとする方策が現実的にしばしば採用されている。

本研究企画では、上記の状況を考慮して、(1)政治学に代表されるマクロ・レベルからのアプローチと人類学が得意とするミクロ・レベルからのアプローチによってアフリカ・オセアニア両地域の紛争理解を試み、さらに(2)アフリカとオセアニアの紛争事例を突き合わせた比較検討を行なう。これら二つを対照することにより、(A)アフリカ・オセアニア両地域にみられる紛争に対する新たな研究視角を得つつ、(B)現代の紛争に関して一般化した議論を構想したい。

■ 日時:

2012年12月9日(日)13時~18時(予定)

■ 場所:

国立民族学博物館 第5セミナー室

■ 発表者

石森大知、岡野英之、佐川徹、丹羽典生、橋本栄莉、比嘉夏子、藤井真一、村尾るみこ(50音順、敬称略)